慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロバート・G・ウェソン著『なぜマルクス主義か：失敗した理論の持続する成功』
Sub Title	Robert G. Wesson, Why Marxism? : the continuing success of a failed theory
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.5 (1977. 5) ,p.91- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770515-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

次々と公刊されている（その一部は、「西ドイツにおける被害者研究の現状について」という小論の中で紹介した。これは、小川太郎博士古稀祝賀論文集に登載される予定である）。

そして、今、学生の国家試験準備のための本ではあるが、犯罪学の最も新しい情報を体系的に整理した本書が出た。日本の学者も、実務家も、この本の内容をつぶさに検討することによつて、われわれの間にわだかまつている古めかしい犯罪学理論に固執するこの陋固とした態度を反省し、国際的な動向に目を向け、古いものから脱却する勇気を持たなければならない。さもなければ、世界の犯罪学の流れからとり残され、小世界の中に安住する自閉的な集団に墮してしまうことは必然の勢いであるというべきであろう。

宮澤浩一

Robert G. Wesson,

Why Marxism?: The Continuing Success of a Failed Theory.

New York, Basic Books, Inc., Publishers, 1976, vi+ 281pp.

ロバート・G・ウェソン 著

『なぜマルクス主義か——失敗した理論の持続する成功』

《西欧マルクス主義》は、逆説的に言えば、マルクスの思想発展を遡行している。ジョージ・リヒトハイムの『マルクスからヘーゲルへ』といつた著書は、それを象徴的に示したものであろう。マルクス自身が哲学から政治・経済（科学的理論）へという方向をたどつたこと、あるいは、哲学の方法や認識論の問題を乗りこえようと努力したことは初期マルクスの諸作品とか『ドイツ・イデオロギー』のうちに窺うことができるし、エンゲルスの『反デューリング論』によつて証左されてもいよう。しかしながら、現代の著名なマルクス主義者たち——ルカーチの『歴史と階級意識』およびコルシュの『マルクス主義と哲学』を嚆矢として——には、マルクス以前の哲学に立ち帰ろうとする思想解釈がきわめて特徴的であるばかりでなく、彼らの依りどころとする思想家はきわめて多彩であり、また必ずしも一致したものではない。例えば、ルカーチ、アドルノ、マルクーゼ等のヘーゲル、デルラ・ヴォペのルソー、アルチュセールのフィヒテ、カント、ゴルドマンのパスカル等。

右と関連して、現代マルクス主義者のおびただしい著作にみられる傾向は、先ず専門哲学者の教養によつて生みだされた、特殊化された晦渋な言語と、主題の特異な変奏であろう。彼らの主たる問題関心は、革命的大衆へのアピールではなく、いわゆる「上部構造」の文化の分析に向けられていることであろう。ごく常識的に例示してみれば、ルカーチのヨーロッパの小説批評や美学研究、アドルノの音楽批評、ベンヤミンの『複製時代における芸術』や『ボードレル論』、マルクーゼの『エロスと文明』、サルトルの『聖ジュネ』や『フローベール』等。これらの精度の高い知的作品が、それぞれ魅

力的な文化的テーマを取り扱い、ブルジョワ的階級支配におけるイデオロギーの探究にオリジナルな貢献をなしている事実は、充分に認められるけれども、それらは、たとえ若きマルクスの思想のうちにすら見出されるのかどうか、果たして疑問である。さらに、以上述べた西欧マルクス主義に一貫している歴史感覚、そのあまりに陰鬱なペシミズムは、エンゲルスの科学的世界観とは異質的であつて、彼にとつて理解可能なものであるだろうか。

このような《西欧マルクス主義》の知識人グループが、いわゆる《正統派》マルクス主義と対立しつつ、独自の存在理由を主張しうることは、第二次世界大戦にいたる期間、ヨーロッパ・コミュニズムが一方においてスターリン主義とコミンテルンのもとでマルクス主義の理論的不毛化に陥り、他方でファシズムの擡頭による労働運動の弾圧によつて、マルクス主義そのものがプロレタリアートの政治的実践に混乱を招き、それと分離してしまつた悲劇を物語るものであろう。それと同時に考慮されなければならないのは、少なくとも第一次大戦以前には、古典的マルクス主義なるものが、マルクスの『資本論』を基礎として、資本主義の生産様式、運動法則をめぐつて、まさにインタナショナルな水準で展開されていたことである。ドイツ、オーストリア、ロシアのマルクス主義者は、優れた学者であつたとともに、労働者階級の指導的人物であつたことも閑却さるべきではない――ローザ・ルクセンブルグ、ヒルファーディング、バウアー、ブハーリン、トロッキー、レーニン等々。

以上簡潔に述べたとおり、マルクス主義の思想的遺産とその継承は時代的、地理的、さらには世代的な内容と意義をあわせて検討されなければならない。実際に、マルクス主義についての真の唯一可能な解釈が存在したのではなく、そして現在においてもそうではないのだから。

ところで、右のようなマルクス主義の深遠（ケンテリック）な思想とその系譜学的考察を試みることとは別に、ロバート・G・ウェソンの著書は、きわめてアメリカ的なアプローチであると言つてもよいだろうが、マルクス主義理解にとつてひとつの彩り豊かな示唆を与えてくれるものである。先ず彼の言葉を引照してみよう。

「マルクス主義はひとつの非常に特殊な信条である。ひとりの思想家は、プラトン、カント、ジョン・デューイ、ホッブズ、もしくはロックに多少とも負うているかも知れない。しかし彼は、真の追従者たることをそれ程重んじたがらない。ひとは、自分の思想がヒュームとかヘーゲルをいかに精緻に解釈しているかを強調するようには思われない。その代りに、思想的負債を承認することはするけれども、自己自身の進歩を恐らく強調するだろう。マルクス主義は半ば宗教的なものなのである。マルクスの真の意味への帰依は、それ自体美徳と見なされ、多種多様な学派の社会的急進派たちは、彼ら自身を真のマルクス主義者であると考えることを義務と感じている。レーニン主義者、毛沢東主義者、社会民主主義者、左派的リベラルズ、トロッキスト、第三世界の反抗者は、相互に不和であるけれども、こぞつてマルクス主義者たることを主張する。」

「マルクス主義の現代の力というものは、その理論の説得性によつてではなく、それを公認の神話学としている諸国家の権力によつて説明されるべきものである。マルクス主義は思想的に重要であり、大部分真剣

に受け取られなくてはならないが、それは政治的に重要だからである。こうした理由から、知識人はそれを分析し、掘りおこし、もろもろの深遠さ――たとえそれらに積極的に畏敬の念を感じさせられなくとも――を彫琢しなければならない。かくも多数の人びとを煽動し、名目的には世界人民の三分の一を支配している信念には、何ものかがあるに違いないと想定されよう。マルクス・レーニン主義国家に関する知識の必要性が、マルクス主義的社会学への関心を駆り立てるということは、たとえまつたく論理的でないにもせよ、理解可能なことだ。マルクス主義の教義をきわめて真剣に取りあげるということは、通常、少なくとも部分的にはそれを真なものとして受容することを含意する。思想的に洗錬された者にとつてさえも、大国の後楯があることは、マルクス主義に偉大な信用を与えている。政治的事柄においては、いかなる議論も成功と比べて説得力は半減する。そして、マルクスの分析の適切さがいかなるものであつても、まさに彼の名のもとに為されてきた一切のものからして、いささかなりと彼に畏敬の念を感じさせられないというのは困難だ」。

ウェソンの「なぜマルクス主義か」という問いに対するひとつの解答は、ここに明示されている。本書の「まえがき」のなかで、「マルクス主義のような使い古された主題に関して新しい一書を呈する際には、この主題に関してさらに別箇の論究を附加することがなぜ必要と考えられるかについて、ある説明を読者に提示することが慣例である。要するに、その答えは、本書は、マルクス主義に関するものというよりもむしろ、なぜかくも多くの書物がマルクス主義に関して書かれているのか、ということなのである。このことは、教義の分析――涯し無い、不可解な課題であつて、ここではそれに少しも注意が払われてはいないが――によつて理解されるべきものではなく、大国の支配権のもとに入つたさまざまの人民、政党、革命運動にとつてのマルクス主義の使用の仕方の研究、すなわち一種の真面目な政治的詩想としてのマルクス主義の研究によつて理解されるべきものなのだ」とウェソンは書いている。このような研究の発想を挑発的な粗暴さとのみ見なすことは、厳正明晰な態度であるだろうか。

ウェソンは同じ「まえがき」において、あらかじめ草稿をアダム・B・ウラムならびにミラード・ドラチコヴィッチに見せ、彼らから寄せられた論評に対して謝意を表している。両者ともにアメリカにおけるマルクス主義研究者、とりわけ国際共産主義の専門家として著名であり、数多くの優れた研究業績を残している。後者についてわたくしは詳しく知らないが、前者については、その著書のひとつ、『未完の革命』の訳者として結びつきがある。この度、ウェソンの本書を読む機会を得たのも、以上のような関係があつたからにほかならず、わたくし自身の裡には、『未完の革命』において提起された、当時としてはきわめて鮮烈な問題――マルクス主義を工業化過程のダイナミズムと対応させ、その有意味性(レリヴァンス)を問う――が、どのように再確認され、さらに広い視座のなかで再把握されているか、ということが念頭に措かれていたのは言うまでもない。

ウェソンのアプローチは、基本的にはウラムのそれと符節を合わせている。わたくしは前掲訳書の「あとがき」において、「これは大胆な命題である。ブルジョワ革命―プロレタリア革命という歴史発展のマルクス主義的二段階説は、《工業化》過程に置き代えられる

ことになる。しかもこのことが、マルクスの理論的正当性によるのではなく、むしろそのイデオロギー的呪縛性によつて見事に証明されているのである。パラドキシカルな表現であるが、マルクス主義的《誤謬》のゆえに、工業化しつつある社会にそれが実感としてアピールすることになる」と記して、ウラムのつぎの言葉を引用しておいた。「工業化と近代化に到達しつつあるどのような社会も《マルクス主義的》時期を体験する。その時には、マルクスの思想のあるものがその社会の問題に適切であり、人民大衆の日常的感情に反映される。マルクスの名前とか彼の運動が彼らに知られていなくとも。……それ故にまた、工業化を遂げつつある社会において、大衆はもとより知識人や科学者に対してもマルクス主義がアピールする堅牢不抜な性格があるのである。マルクス主義は、彼らにとつて事実と数字をもつて納得させようとする新しい議論としてでは全然なく、彼ら自身が思想と感情を整合し、統合する何ものかとしてあらわれるからである」。そしてさらに、近代的工業化のインパクトは、マルクス主義の理論的にアンビバレントな性格のゆえに、問題の新しい認識の次元がたちあらわれ、「われわれは依然として未完の革命のさなかにいる」と。

このように、ウラムもウェソンも、マルクス主義の思想自体の分析を目的としていないことは先程述べられたとおりである。しかしウェソンの場合、七〇年代初期このかた、アメリカにおいてもニュー・レフト運動とともに、マルクスの原生的思想への関心が深まり、冒頭に素描したような西欧マルクス主義研究が飛躍的に発展し、ヨーロッパのアカデミズムと並び立つほどの、密度の濃い多彩な重要文献が相次いで出版されていること、したがつて当然のことながら、ウェソン自身はこれらの研究状況を熟知しており、ウラムと比較して、思想的理解も一層深く、かつその知識もアップ・ツー・デートなものである。例えば、「若きマルクス」なる一節では、『経済学・哲学手稿』における疎外をめぐる論争について、ロバート・タッカーの『カール・マルクスにおける哲学と神話』に触れられ、ルイ・アルチュセールの『甦るマルクス』におけるマルクス主義ヒューマニズムへの批判――「認識論上の切断」の問題――も取りあげられている。

いずれにせよ、ウェソンにとつては、「西欧知識人たちにとつて疎外やマルクス主義《ヒューマニズム》がどのようなものであつても、マルクスが一八四四年に著述の筆を折つていたとしたら、今日記憶されることはないであろう。社会は、資本主義の不幸からの救済についていささか新しく哲学することによつて支持され、社会は転覆することを必要とするのだといつた、むしろ広く共有されていた確信が、マルクス主義を一箇の強力な体系につくりあげたわけではけつしてなかつたろう。疎外とは、政治的動員化のための否定的な価値の、ロマン主義的、個人主義的、幾分深遠な概念である。恐らくこのような理由から、マルクスとエンゲルスは……初期の草稿を《ねずみの齧じる批判》にまかせたのだ。彼らはヒューマニズムについて語ることに軽蔑を浴せ（例えば『共産党宣言』のなかでそれを放棄している）、一八四四年以降は、古典的マルクス主義へと生

成するより一層攻撃的な諸理論へと転向して行つた」と断言されている。

ウェソンは、マルクスの史的唯物論が人間的現実の経済的側面を強調した重要性、社会構成体にとつてのテクノロジーの役割とかイデオロギーの作用を明らかにした明察力、あるいは《資本主義》として総括される生活様式に内在する諸害悪――階級抑圧、富の追求と不平等、人間的諸価値の破壊等――への痛烈な批判は、まさにマルクス主義の核心をなす永続的なテーマとして評価する。しかしながら、マルクス主義の魅惑はその知的内容にあるのではなく、「革命のメタフィジックス」(G・リヒトハイムの言葉)以外の何ものでもない。ある著名なマルクス主義者は表明しているが、マルクス主義の思想はとにかくとして、その方法は事実によつて論駁されない、確固たるものである、と。例えば、マルクスのヴァイデマイヤー宛書簡のなかで、彼が証明しようとしたことは、(1)諸階級の存在は、生産の発展における特殊な歴史段階と結びつけられること、(2)階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に導かれること、(3)この独裁そのものが階級の廃棄と無階級社会へと歴史的移行を構成すること、と述べられている。しかしながら、これらはいずれも問題的である。ウェソンにしたがえば、マルクスは複雑な重層的人間世界を壮重な単純化に還元し、二重構造的に捉える、という確信を提示したにすぎない。そして、「ここにこそ、彼の基本的な誤謬と基本的なアピールとがある。」(傍点は引用者による)。

結論的に言えば、マルクス主義は、科学的・経験的命題として検証可能かどうかという問題の次元を超えた、「神と語る予言者の自己確信」にほかならず、旋回状の論議をとおして問題を過度に単純化する方法こそ、或る種のドグマに適したものであろうけれども、その教義は「倫理的―宗教的真理」として受容されるべきものである。「マルクス主義者は、ダーウィン主義者と異なつて、美徳としての正統性を要求する」。しかしながら、ウェソンの論点は、マルクスも彼の同時代人たち――サン・シモン、フーリェ、プルードン、ブランキ、バクーニン等と同様に、産業革命の衝撃、新しいブルジョワ階級の出現、さらにフランス革命のラディカルなプロテストのうちにはぐくまれ、西欧社会の近代化と工業化に対して、いかに「人間的対応」を行つたか、ということに置かれている。いまここに、ロシア、中国、第三世界におけるマルクス主義の多様な変容を記述し、ウェソンの経験的データと蘊蓄のなかから汲みあげた知識を例証する余裕はないが、「共産主義は後進性の一現象である」というジョン・カウツキーの命題――勿論それはウラムのものと等質である――に依拠して、つぎのように書いているところを銘記しておきたいと思う。

「ロシアは、レーニン主義的革命の当時は後進的であつたし、みずからもまたそう感じていた。共産党が権力への途を闘いとつたアルバニア、ユーゴスラヴィア、その他ヨーロッパ諸国は、大陸にあつて最も貧困であつて、工業化されていなかつた。中国は、マルクス・レーニン主義政党が権力掌握したときには、西欧的技術文化から見れば、非常に後進的な国であつた。ギニアとかコンゴ人民共和国のごときアフリカ諸国

は、半ば共産主義的政党を持つている。そしてキューバは、その巨大なる隣国と比較すると、とりわけ後進性に苦悩していて、ブルジョワ＝民主主義革命をカストロのもとでマルクス・レーニン主義的社会主義へと改良したのである。しかも先進工業世界のどこにおいても、共産主義革命なるものは、例外的な混乱の短期間を除いては、成功に近づいたことも皆無であつた。」

「マルクス主義が、イデオロギー的選択になんらの物理的強制力のもとに置かれていない人びとによつて、最も熱烈かつ無批判に支持されているのも、また低開発諸国においてである。非ソヴェト圏のヨーロッパにおける多数の知識人たちが、最近においてはマルクス主義に大いに影響を受けてはいるが、彼らは一層批判的な傾向にある。つまり、ドイツ、フランス、イタリアにおけるマルクス主義、もしくはマルクス主義に影響されている諸思想は、相互に競合と対立の関係に遭遇しているのである。」

「このような変則は、あまたの論評を誘引している。産業プロレタリアートの教義であるマルクス主義は、爛熟した資本主義の運命を説きながらも、マルクス的意味におけるプロレタリアートが取るに足らず、しかも資本主義建設への途上に殆んど踏み切つていない諸国において、最も有益であり魅力的であることが証明された。マルクス主義は、工業化の諸帰結に基礎を置いた教義から、政治的指導のもとにおける工業化と近代化のためのイデオロギーとなつた。すなわち、変化の結果についての研究が、変化への動機づけとなつたのである」（傍点は引用者による）。

マルクス主義が工業化しつつある時代に有意味であるとすれば、それが《知識人》を運動の担い手として、後進諸国においては、西欧型資本主義に対する反西欧主義や反帝国主義、あるいは階級闘争よりもむしろ反植民地闘争とか民族解放闘争という形態をとつて、持続してゆくであろう。それに反して、先進工業諸国における展望はどうであろうか。ウェソンの見解によれば、マルクス主義なるものは「疎外された知識人」のイデオロギーである以上、今後も反戦・反ファシズムのうちにマルクス主義的知識人としての尊敬と信頼を見出すことだろうと思われる。しかしながら、一般的に言つて、「もしも《イデオロギー》が、明確なるコミットメントを要求するある統合された世界観なり歴史理論を意味するものと受け取られるならば、それは、マルクス主義か、または或る変型とほとんど等価的なものである。つまり、それらに真に対抗するものは少しも存在しないのだから。なぜマルクス主義かという問いも、したがつて実際には、現代世界におけるイデオロギーの強さへのひとつの探究なのである。こうした理由から、マルクス主義的傾向を持つた人びとは、イデオロギーの没落というテーゼ一般に抵抗する。だが、イデオロギーが教条的、競争的、ユートピア的信条を意味するとすれば、われわれは、最近数十年におけるその没落を、ないしは、イデオロギーの本質と考えられていたこれらの諸性質の喪失を、容認しなければならない」というのが、ウェソンの判断である。

だが他方において、マルクス主義が、他のいかなるイデオロギーにも増して、六〇年代の「再イデオロギーの出現」が幻想であつたにもかかわらず、反体制的プロテストのラディカルな運動、暴力革命への志向を装つた思想状況を反覆させてゆく可能性は少なしとしない。このことは、現代世界の新しい危機意識の反映でもあろうけ

れども、ウェソンの指摘をまつまでもなく、われわれは、工業社会への移行過程とはまったく異質の《問題》状況を眼のあたりにしている。核戦争の脅威、国際貿易と金融の不均衡。人口問題、エネルギー資源問題、環境汚染の危険性、南北問題等々——現代は、ダニエル・ベルの言葉どおり、近代工業社会から脱工業社会(post-industrial society)への移行が、もはやたんなる人間生活における生産様式の変化にとどまらず、人間の思考様式そのもののドラスティックな変革を迫つている。「なぜマルクス主義か」という問いは、マルクス主義がマルクス主義にとどまるかぎり、この新しい移行段階にとつて有意味かつ適切な解答を準備し得るのかどうかという問い詰めを当然含んでいるわけである。

この点に関しては、ウェソンは以下のように書いている。「マルクス主義は知的世界、とりわけ西ヨーロッパと日本のなかに、だがアメリカの幾つかの研究所の周辺にも根付いている。マルクス主義の訓練を受けた人たちは、マルクス主義的思想と研究方法とにある特権を有している。そして彼らは、マルクス主義に傾斜した学者たちの新しい世代を育成するであろう。次の世代を嚮導する教授連の多くは、最も情熱的なラディカリズムの数年間に形成された若者から生じるであろう。大学におけるマルクス主義者たちは、正しい思想を抱いているという確信を以て、他のマルクス主義者たちを推挙する傾向にあるが、反マルクス主義者をバランスをとつて招聘すべきだとは提案しない。たとえ、マルクス主義的教義の特殊な論説が現実に一致しないとして不採用にされるとしても、ネオ・マルクス主義者、あるいはポスト・ネオ・マルクス主義者が、彼らの能うかぎり、その言語と普遍的アプローチ(《創造的マルクス主義》)を維持して、それらを彼らの後継者たちに伝達してゆくように思われる」と。

Why Marxism? あるいは *Why the neo-Marxist?* 少なくとも或る知識人はこれに対してつぎのように答えるほか無いかも知れない——*Marx ex machina!*

奈良和重